

東南  
アジア

祭  
'92

Southeast  
Asian Festival



# プログラム

スケジュール／会場案内 6

## Exhibition

花宇宙～生命樹—アジアの染め・織り・刺繡～ 8

美術前線北上中 東南アジアのニュー・アート 10

アジアこども絵画コンクール展 12

## Performance

「チリック・チリック・バリ(バリのこどもたち)」 ガムラン音楽と舞踊 14

東南アジア・ポップス海道 16

「ボロブドゥールの嵐」 日本＝インドネシア共同制作舞蹈作品 18

「ピューティー・ワールド」 シンガポール・ミュージカル 20



## Symposium

シンポジウム 22

## Forum

東南アジア感動体験隊フォーラム 24

## Sport

セバタクロー 東南アジア式足蹴りバレーボール 26

## Film

「サザン・ウインズ」 アジア4カ国共同製作 omnibus映画(東南アジア映画祭 PART1) 28

東南アジア映画祭 30

PART2 リノ・ブロッカの遺産と東南アジア・マスター・ピース

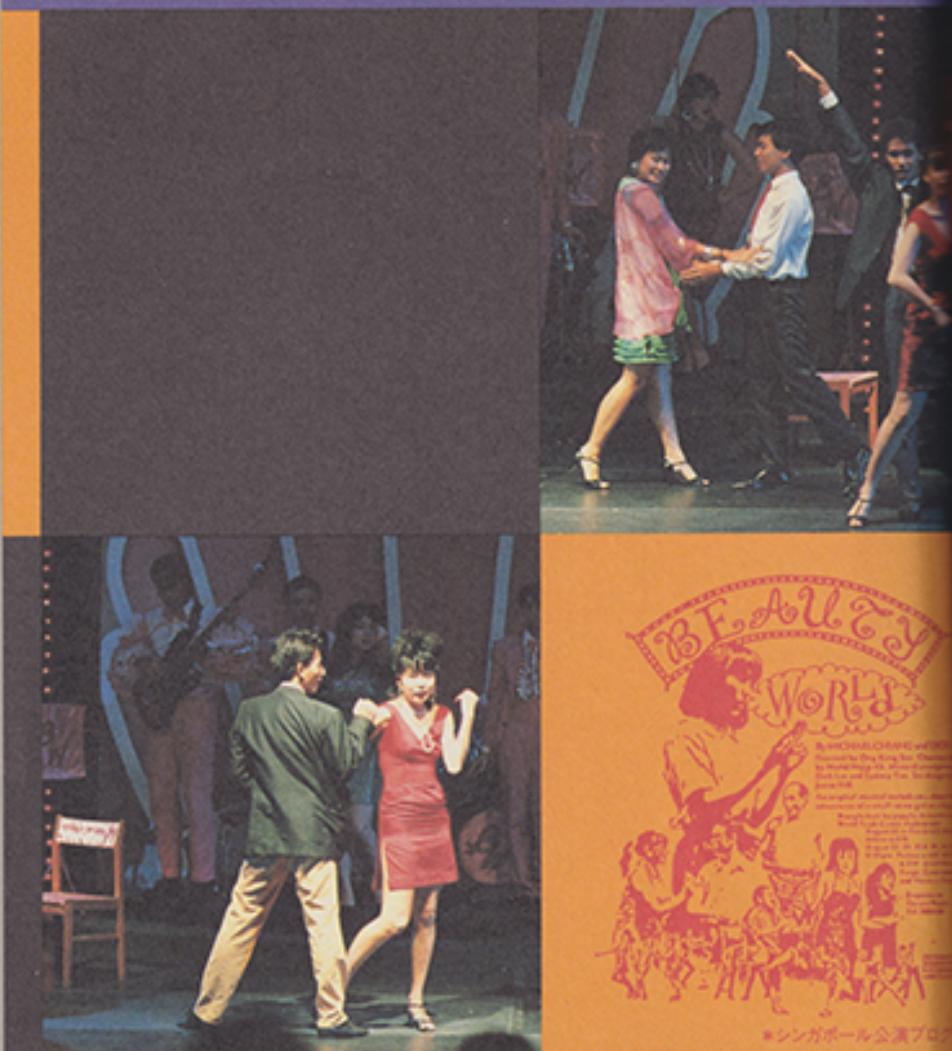
PART3 アセアン・ヤングシネマ・フェスティヴァル

シンガポール・ミュージカル  
『ビューティー・ワールド』

シンガポールの新世代演劇をリードする若手演劇人とアジア・ポップスの旗手ディック・リーが1988年に創った、シンガポール初のオリジナル・ミュージカル。60年代にシンガポールで流行った“広東メロドラマ”的スタイルを取り入れた意外性、シンガポール人の日常英語である“シングリッシュ”を初めて堂々と舞台にのせた大胆さ、ディック・リーの音楽の楽しさで大評判を呼び、シンガポール演劇の記念碑的作品と評されました。

## 会場・日程

〔大阪〕  
大阪国際交流センター〈大ホール〉  
9月17日(木)18:30  
〔東京〕  
Bunkamuraシアターコクーン  
9月20日(日)14:00  
9月21日(月)19:00  
9月22日(火)19:00  
9月23日(水)14:00  
〔広島〕  
アステールプラザ〈中ホール〉  
9月30日(水)18:30  
〔福岡〕  
ももちレス  
10月3日(土)14:00



## 「シアターワークス」

マレー系、中国系、インド系より構成される多民族国家シンガポールは、マレー語、マンダリン、タミル語、英語の4言語を公用語とし、演劇もまたマレー、マンダリン、タミルのそれぞれの言語で上演されてきた。こじれた民族の枠を乗り越える試みが演劇において始まったのは、1980年代に入ってからのことである。「シアターワークス」は、その流れの中から現れた、初の英語によるプロ劇団である。1985年の創立以来、次々と実験的な試み

作=マイケル・チャン

作詞・作曲=ディック・リー

演出=オン・ケン・セン

出演=劇団「シアターワークス」



\*写真はすべて1988年シンガポール公演より

を発表してシンガポール演劇界に鮮やかな風込み、いまやシンガポールを代表する、最も動員する劇団に成長している。多民族国家らしく、制作、国系、マレー系、インド系をはじめ、さまざまな国籍ラフが同わり、シンガポールのコスモポリタン的なぞかせている。

レバーリーはブロードウェイ・ミュージカルから「近代錦楽集」まで幅広く、特に、シンガポールを見据むオリジナル作品に定評がある。

本年2月に国際交流基金アセアン文化センター等には「スリー・チルドレン」で日本デビューを果たすだけでなく、8月には「毛夫人の思い出」が英国・ノバ・フェスティバルで上演されるなど、アジアを中心とした国際的躍進中。



# B E A U T Y W O R L D

Written by Michael Chiang  
Lyrics and Music by Dick Lee  
Directed by Ong Keng Sen  
Presented by Theatre Works

シンガポール初の  
オリジナル・ミュージカル  
『ビューティー・ワールド』



ものがたり

舞台は60年代半ばのシンガポール。ちょうどシンガポールがマレーシアから分離独立を果たした頃のことである。マレーシアのジヨホールで育った純情無垢な娘アイヴィーは、赤ん坊の時、美容院に父に置き去りにされた孤児である。父が残したという翡翠のペンダントに形られているビューティー・ワールドの文字が、シンガポールにあるキャバレーを指すらしいと聞いたアイヴィーは、単身、大都会シンガポールにやって来る。

イルミネーションも鮮やかなビューティー・ワールドに何とか住み込んだアイヴィーは、やり手のママヤナンバーワン・ホステスのルル、上客の華僑商人ニオとタンなどの繋りはず人間模様に見えてくるが、父を探し出そぞ必死である。ある晩、ルルの手引きでアイヴィーはタンに犯されそうになり、その拍子にペンダントを落とす。それを見たタンは、同じペンダントを以前にビューティー・ワールドのオーナー、クウェックからもらったことを思い出す。クウェックにたたずむビューティー・ワールド開店の時に同じペンダントを5個特注し、1つは自分が持ち、1つはタン、1つはママ、1つはニオにプレゼントしたというクウェック、タン、ママ、ニオはまだペンダントを持っている。ということは残る1つの行き先がアイヴィーの父? 皆が困惑を飲む中、クウェックの言葉は意外なものだった。「昔、隣に住んでいた若い娘にやったその名は……ルル」

60年代シンガポールのレトロな夜が、日本に甦る。

